

## 韓偓及び晩唐詩人の「無題詩」

——李商隱の後裔たち——

鈴木義昭

李商隱「無題詩」には文字通り、題が失われたために、後代の人間が敢えて「無題」と名付けたものがある。例えば、清の紀昀は「萬里風波一葉舟」をそれと斷じた。<sup>(1)</sup>或は原題が何らかの原因で變えられたものもある。「白道勞廻入暮霞」には「一云陽城」という注記があつて、その間の事情が推理される。

また一方で、「無題詩」に政治的寓意を見出す読み方も有力である。それは同時に自己の不遇を假托することと同義でもある。男女が相會えないことに借りて、自己を推す人間に出會えないことを歎く構造を取ることが多い。例えば、張采田が「相見時難別亦難」にそれを見るのも、<sup>(2)</sup>こうした發想による。或は「八歲偷照鏡」中の「芙蓉」の語注に、馮浩が屈原「離騷」及び揚雄「反離騷」を引くのも故なしとしない。<sup>(3)</sup>

三番目に、何焯が「美人香草の遺あり」とした眞の戀愛詩としての「無題詩」がある。ただ、一般的に言つて、それは時間・空間の明示を拒否することによって成立する世界である以上、特定の人物を指名することには多大な困難が伴う。本稿で取り扱う韓偓及びその他のマイナー・ポエトたちの一連の「無題詩」の對象指定には、李商隱のような歷代諸家の手厚い考證により類型的指摘のできる詩人に比して、すぐれて障害が多いと言わねばならない。

本稿では、こうした詩人たちの手になる「無題」と名付けられた作品の中に見られる李商隱的な部分を取り扱うことにしたい。ただし、李商隱流の二字乃至三字の題を持つ「無題詩」的雰圍氣を持つ作品については、原則的には觸れず、専ら北宋の楊億らの『西崑酬唱集』に至る前驅的段階を眺めることになる。

韓偓『香奩集』卷二に「無題」四首が収められている。それに付せられた自注には次のように言う。<sup>(5)</sup>

余辛酉年、戲作無題十四韵。故奉常王公相國首於繼和、故内翰吳侍郎融、令孤舍人渙、閣下劉舍人崇譽、吏部王員外渙、相次屬和。

時間・空間を超越すべき「無題詩」に「辛酉の年」(AD九〇二)との注記は、既に「無題詩」としての資格を疑うに足るものであるし、「戯れに作る」との語も内容についての想像を減じ去るものである。ついては、第一首を詳しく見ておきたい。便宜上A~Gまでに段落分けをして左に示す。

小檻移燈地、空房鎖隙塵。額波風盡日、

簾影月侵晨。<sup>A</sup> 香辣更衣後、釵梁攏鬢新。

吉音聞詭計、醉語近天真。<sup>B</sup> 妝好方長歎、

歡餘卻淺顰。<sup>C</sup> 繡屏金作屋、絲幃玉爲輪。

致意通縣竹、精誠託錦鱗。歌凝眉際恨、

酒發臉邊春。<sup>D</sup> 溪紵殊傾越、樓簫豈羨秦。

柳虛禳沴氣、梅實引芳津。<sup>E</sup> 樂府降清唱、

宮廚減食珍。<sup>F</sup> 防閑襟并斂、忍妬淚休勻。

宿飲悠繁夢、春寒瘦著人。手持雙荳蔻、

的爲東隣。…<sup>G</sup>

から内容を考えるには、些か不明瞭な箇所が多過ぎる。

「辛酉の年」は唐の昭宗天復元年に當る。初めに王溥、次いで吳融、令狐渙、劉崇譽、王渙たちが偃の右の詩に和したというわけである。ここに登場する人物は偃を含めて計六名。王溥は偃を翰林學士に推舉し、後年逆に彼によって宰相となった人物である。<sup>(6)</sup> 吳融は字を子華と言ひ、偃と同年の進士。後、中書舍人に至る。<sup>(7)</sup> 令狐渙は宰相令狐綯の子。祖父は楚。所謂「再生の宰相」の家系である。兄瀉の評判の惡さの陰に隠れてか、正史に本傳を持たない。しかし、「機巧」に富む人柄ではあったらしい。後、偃と同時に中書舍人に任ぜられている。

王渙は字を羣吉と言ひ、大順二年（AD八九二）の進士。韓偓、吳融の三年の後輩に當る。考功員外郎を経て、禮部侍郎に至る。<sup>(9)</sup> 劉崇譽は正史に傳を持たないばかりか、『全唐詩』にも詩が收められない。この點では王溥、令狐渙も同様である。

元復元年は昭宗の「反正」の舉によつて知られる。宦官劉季述によつて幽囚されていた昭宗が復位した年である。當時、宰相崔胤に連なる王溥、韓偓、令狐渙たちは、昭宗の功臣として信任篤く、その下問に應じることが多かったようである。彼らと親交のあった吳融、劉崇譽、王渙たちが一堂に會した時、偃の詩に和して作られたものが、彼らの「無題詩」であつた。しかし、今日我々が目にするもののは、吳融のそのみである。

珠佩元消暑、犀簪自辟塵。拈燈容燕宿、

開鏡待鷄晨。去懶都志舊、來多未厭新。

每逢憂是夢、長憶故延眞。杏小雙圓壓、

韓偓及び晚唐詩人の「無題詩」（鈴木）

## 中國文學研究 第八期

山濃兩點嘯。瘦難勝寶帶、輕欲馭廳輪。

篋鳳金雕翼、釵魚玉鏤鱗。月明無睡夜、

花落斷腸春。解舞何須楚、能寧可在秦。

怯探同海底、稀遇極天津。綠奈樊宮艷、

青梅弄嶺珍。管纖銀子咽、梭密錦書勻。

壓勝還隨俗、無疑不避人。可憐三五夕、

斌媚善爲鄰。

韓偓が「小檻燈地を移し、空房隙塵を鎖す」として、李商隱「聞歌」（以下李商隱詩の引用は四部叢刊本『李義山詩集』による）中の「香地燈光爾を奈何せん」の句を想起させれば、吳融の方でも、商隱「碧城三首」其の一「犀は塵埃を辟き玉は寒を辟く」を仄めかす「珠佩之より暑を消し、犀簪自ら塵を辟く」の句で應じる。また、偓が「簾影月晨を侵す」と詠んで、李商隱「李夫人三首」其の三「更に許す夜簾通曉の霜」を引けば、融は「燈を拵ふ容燕の宿、鏡を開く待鶏の晨」として、「屏風」中の句「燈を掩ふ遮務密なること此くの如し」或は「陳後宮」中の「夜を侵して驚鏡を開く」を彷彿させる。さらに、韓偓の用いる「金もて屋を作る」は漢武帝の故事に因んだ李商隱「金屋脩成りて阿嬌を貯む」（茂陵）、或は「黄金屋を作るに堪う」（無題「近知名阿侯」）からの連想であろうし、「絳竹」も揚雄に係わる商隱「幾時ぞ絳竹頌」（令狐舍人説昨夜西掖翫月因戲贈）が影響していると考えてよからう。吳融は「錦書勻る」とするが、「錦は長く書は鄭重」（無題・「照梁初有情」）を踏まえたとするれば、寶滔の妻蘇若蘭の織錦廻文の故事によったであろう。韓偓は「錦鱗」を用いているが、「柳枝五首」其の四「錦鱗と繡羽と」を受けているとすれば、男女の別れ及び捨てられた女性を寓意すると思われる。

以下、韓偓、吳融の順で、兩詩の中にちりばめられている李商隱詩を列舉しておく。

釵梁 釵茸翡翠輕（「無題」）「照梁初有情」

照梁初有情（右に同じ）

天真 卷舒開合任天真（「贈荷花」）

繡屏 畫屏繡步障（「柳枝五首」其の五）

歌凝 歛笑凝眸意欲歌（「聞歌」）

樓簫 豈知一夜秦樓客（「無題」）「聞道閨門幕綠華」

欲羨秦臺簫（「又效江南曲」）

芳津 樵卷無芳津（「行次西郊作一百韻」）

樂府 樂府聞桃葉（「妓席」）

清唱 一曲清聲遶畫樓（「席上贈人」）

歌唱落梅前（「憶雪」）

宮廚 虛減宮廚爲細腰（「夢津」）

春寒 春寒夜夜添（「異俗二首」其の二）

その他、格別な典據を證明することはできないとしても、「風」、「月」、「香」、「恨」、「春」、「柳」、「梅」、「愁」、「夢」等の語は、李商隱によって用いられる時、かなり特殊な語感を持つ詩語となるケースが多い。

同様に、吳融の用語を擧げておく。

玉鏤鱗 屋瓦鏤魚鱗（「殘雪」）

韓偓及び晚唐詩人の「無題詩」（鈴木）

斷腸 先春已斷腸（春風）

解舞 蝶解舞宮城（徘徊）

底海 海底覓仙人（海上謠）

海底飄無水（聖女祠）

天津 二江風水接天津（寄成都高苗二從事）

さて、ここで内容についても一度振り返ってみよう。韓偓を含めた六人が相次いで屬和することのできた内容とは何であつたか。六人が六人とも共通の意識の下で詠んだとすれば、それは昭宗の反正の舉であり、その慶賀の詩であつたはずである。確かに「戯れに作る」との自注を持つてはいるが、「戯」が全くの言語遊戲でない例は少なくとも李商隱にも存在する。一種の韜晦である場合もあれば、直截に表現するのを忌避する場合にも用いられる。既に五十歳を迎えていた韓偓の年齢から来る韜晦とも考え得るが、ここでは昭宗への慮りが働いたと考えるのが穩當であろう。以上のことから、私は韓偓「無題詩」第一首を次のように理解しておきたい。すなわち、A段では、昭宗幽囚の對策を練つて深更まで及んだこと、B段では、反正の舉はなつたが、新たな體制になお不安が残つてゐることを言う。C段では、意中の人である昭宗を迎えるに當つて、却つて逡巡してゐるさま、D段では、昭宗を宮中に迎えんがために心を腐してゐるさまを描く。E段は、すでに帝の御意を得るとともに、忠臣の協力を見て宮中の害が除かれたこと、F段は、宮中での宴會が盛んに行なわれ、これまでの勞苦が報われたことを詠じる。最後のG段では、昭宗が嚴として君臨していることを感じつつ帝のため盡力していることを示している、と。

二首以下の諸詩もやはり宮中に平穩が戻つてきたことを詠んだものである。これらに李商隱詩から得たと思われる詩語が頻用されていることは言うまでもない。以下はその例である。

碧瓦 碧瓦、銜珠樹（「碧瓦」）

柳昏 柳、暗將翻巷（右に同じ）

書密 證、逮符書密（「有感二首」其の一）

偷樂 常娥應悔偷靈藥（「常娥」）

偷桃 偷、桃竊藥事難兼（「月夜重寄宋華陽姊妹」）

錦囊 錦、囊名畫掩（「燈」）

羅襪 全家羅襪起秋塵（「寄成都高苗二從事」）

嬌饒 風蝶強嬌饒（「無題」）幽人不倦賞（「重疊贈嬌饒」）

重疊贈嬌饒（「碧瓦」）

茜袖 茜、袖捧瓊姿（「和鄭愚贈汝陽王孫家爭妓二十韻」）

烏衣 烏、衣事莫尋（「趙三橡」）

隔箔 隔、箔山櫻熟（「曉起」）

黃竹 勸裁黃竹莫裁桑（「華山題王母祠」）

黃竹 黃、竹歌聲動地哀（「瑤池」）

碧桃 唯應碧、桃下（「聖女祠」）

可美 可、美瑤池碧、桃樹（「石榴」）

碧桃 碧、桃紅、頰一、千、年（右に同じ）

瑤池 瑤、池歸、夢、碧、桃、閑（「曼倩辭」）

韓偓及び晚唐詩人の「無題詩」（鈴木）

翦燭 石家蠟燭、何曾翦、（牡丹）

剪蠟、淚爭流（擬意）

東阿 駐馬魏東阿、（鏡檻）

橫波 道却橫波字（追代盧家人嘲堂內）

曉夢 莊生曉夢、迷蝴蝶（錦瑟）

三百年間同曉夢（詠史）

殘燈同曉夢、清輝（夢令孤學士）

廻腸 廻腸、九廻後（和張秀才落花有感）

瓊樹 瑤林瓊樹、含奇花（安平公詩）

誰言瓊樹、朝朝見（南朝）

已隨江令誇瓊樹（對雪二首其一二）

さて、これまで見て来た韓偓「無題詩」（四首）は、再三觸れたように「無題」という形式を執った一種の「座」の文學である。その意味では、北宋・楊億たちの前驅的存在となっている。李商隱詩が従來歡迎されてきた一つの理由として、その表現の繊細さを擧げることができるが、彼の繊細な表現は「賴祭」の名に象徵されるように、典故引用の巧みに負うところ大であった。引用は詩のような字數の限定を伴った中で情報量を増す際、大きな効果を持っている。しかし、情報が一度既知のものとなれば、表現は勢い陳腐に墮さざるを得なくなる。楊億たち西崑派の消長の原理もそこに見出されよう。韓偓がその直前で辛うじて踏み止まり得たとするならば、年代的に彼が李商隱を繼ぐ位置に居たからでもあるし、時代の趨勢として、繊細・僻澁な表現が求められていたからでもある。



本稿では、「無題詩」という形式に限定して眺めているわけだが、韓偓の「香奩體」としての眞骨頂は「聞雨」、「横塘」、「荷花」、「蹋青」、「寒食夜」、「厭花落」等の二字乃至三字の題を持つ作品に在ろうが、それらの藝術的成就については稿を改めたい。しかし、これまで屢々引いておいた例からも分かるとおり、時間的限定はあるが、「無題詩」作詩における基本的な態度、すなわち寓意、引用等の姿勢は明らかに李商隱派のそれであると考えてよいであらう。

次に『全唐詩』所收の晩唐詩人の手になる「無題詩」を挙げ、作者の略歴及び、李商隱詩の引用と思われる詩句を掲げる。

張喬「無題詩」は以下のとおり。<sup>(10)</sup>

九霄無詔下、何事觸清塵。宅帶松蘿僻、身推猿鳥親。

吟看仙掌月、期有洞庭人。莫問煙霞句、懸知見岳神。

張喬は池州（安徽）の人。咸通年間（AD八六〇—八七四）の進士であったが、黃巢の亂（AD八七五）に遇ったため、官を辭して故郷の九華山に隠れる。許裳、喻坦之、劇燕、任濤、鄭谷らとともに「咸通の十哲」と稱せられ、絶句に佳句が多いと言われる。<sup>(12)</sup>

ただ、ここに挙げた詩をそのまま所謂「無題詩」として取り扱うのには、若干疑問が残る。一つには、『全唐詩』の注に「一作贈友人」とあるからである。李商隱「無題詩」、「白道勞廻入暮霞」が何らかの原因で題を變えられたのと似ている。今一つは内容の問題である。むしろ、これは隱遁詩とも言うべきで、商隱の後裔と呼ぶには無理がある。范晞文は、張籍・杜牧との類似を指摘しているほどである。<sup>(13)</sup>

唐彦謙は以下の十首の「無題詩」を遺す。<sup>(14)</sup>

細草鋪茵綠滿堤、燕飛晴日正遲遲。尋芳陌上花如錦、折得東風第一夜。  
 錦箏銀甲響鷗弦、勾引春聲上綺筵。醉倚闌干花下月、犀梳斜掠鬢雲邊。  
 楚雲湘雨會陽臺、錦帳芙蓉向夜開。吹罷玉簫春似海、一雙綵鳳忽飛來。  
 春江新水促歸航、惜別花前酒漫觴。倒盡銀瓶渾不醉、卻憐和淚入愁腸。  
 誰知別易會應難、日斷青鸞信渺漫。情似藍橋橋下水、年來流恨幾時乾。  
 漏滴銅龍夜已深、柳梢斜月弄疏陰。滿園芳草年年恨、剔盡燈花夜夜心。  
 夜合庭前花正開、輕羅小扇爲誰裁。多情驚起雙蝴蝶、飛入巫山夢裏來。  
 憶別悠悠歲月長、酒兵無計敵愁腸。柔絲漫折長亭柳、綰得同心欲寄將。  
 楊柳青青映畫樓、翠眉終日鎖離愁。杜鵑啼落枝頭月、多爲傷春恨不休。  
 雲色鮫綃拭淚顏、一簾春雨杏花寒。幾時重會鴛鴦侶、月下吹笙和綵鸞。

唐彦謙は字を茂業と言ひ、并州の人。咸通末に進士の舉を受けたが、十餘年登第しなかつた。乾符末年（A D 八七九ごろ）、一家を擧げて漢南の地に移る。彦謙は博學多藝、文詞壯麗と稱され、書畫・音樂方面でも多くの門人が輩出した。鹿門先生と號し、詩文集三卷があつたと言ふ。<sup>(15)</sup>ただ、『唐詩紀事』には、「彦謙義山に學び詩を作る」とある一方<sup>(16)</sup>で、『唐才子傳』には「初め溫庭筠を師とす」<sup>(17)</sup>と記され、評價が一致しない。溫庭筠、李商隱は「溫李」と並び稱せられ、その詩境の類似が指摘されてはいるものの、學ぶ對象にずれがあるのは興味深い。その點を翁方綱は「唐彦謙溫八叉を師とするも、頗る義山の風致を得たり」と折衷した見方を採つてゐる。<sup>(18)</sup>因みに、彦謙の詩語を擧げて比較を試みよう。上段に李商隱、下段には溫庭筠の詩句を記す。

細草、翻驚鴈（離席）

遲遲

尋芳、不覺醉流霞（花下醉）

東風、開花滿城坡（安平公詩）

銀甲、不曾卸（無題）「八歲偷照鏡」

綺筵、省對流鶯坐綺筵（評事翁寄賜餞粥走筆爲答）

闌干、碧城十二曲闌干（碧城三首）其（一）

錦帳

綵鳳、身無綵鳳雙飛翼（無題）「昨夜星辰昨夜風」

愁腸

別易、相見時難別亦難（無題）「相見時難別亦難」

斜月

夜夜心、安知夜、夜意（李肱所遺畫松詩書兩紙得四十

韻）

多情、多情豈自由（卽日）

長亭、歲盡雪如波（過招國李家南園二首）其（二）

同心

畫樓、穿過畫樓深（蝶）

韓偓及び晚唐詩人の「無題詩」（鈴木）

曲江春半日遲遲（長安春晚二首）其（一）

迎風、錦、帳、鮮（感舊陳情五十韻獻淮南李僕射）

愁、腸、斷處春何限（李羽處士故里）

斜、月、到、罽、窠（詠寒宵）

自古、多、情、損少年（程王秀才）

錦中百結皆同心（織錦詩）

畫樓、初夢斷（握柘詞）

## 中國文學研究 第八期

杜鵑 望帝春心託杜鵑（「錦瑟」）

鮫綃 鮫綃、休賣海爲田（「七月二十八日夜與王鄭二秀才

聽雨後夢作」）

吹笙 侍女吹笙弄鳳凰（「留贈畏之」）

清洛月寒吹玉笙（「贈張鍊師」）

右の表は必ずしもすべてを網羅したものではないが、李商隱の詩語の方が多く用いられていることが分かる。少な

くとも、「無題詩」に關しては、唐彦謙の意識は李商隱に傾いていたと言えるであらう。

錢珝には「無題詩」百首連作がある。<sup>(19)</sup> すべて五絶の形式を執っている。ここでは次の十首を挙げるに止めておく。

潤色非東里、官曹更建章。宦遊難自定、來喚權船郎。

憔悴異靈均、非讒作逐臣。如逢漁父問、未是獨醒人。

漸覺江天遠、難逢故國書。可能無往事、空食鼎中魚。

秋風動客心、寂寂不成吟。飛上危檣立、鶯啼報好音。

風好來無陣、雲開去有踪。釣歌無遠近、應喜罷繅鐘。

景夕殘霞落、秋寒細雨晴。短纓何用濯、舟在月中行。

幸有煙波興、寧辭筆硯勞。緣情無怨刺、卻似反離騷。

晚菊遶江壘、忽如開古屏。莫言時節過、白日有餘馨。

數逢雲斷處、去岸映高山。身到章江日、應猶未得聞。

遠謫歲時晏、暮江風雨寒。仍愁繫舟處、驚夢近長灘。

錢珝は字を端文と言ひ、吳興（浙江）の人。吏部尚書微の子で、祖父は起。乾寧末年（AD八九七ごろ）進士に及第

杜鵑、傷春憶晤言（「與友人別」）

翦斷鮫綃、破春碧（「張靜婉采蓮曲」）

昭宗の時、宰相王溥の薦めで中書舍人となる。溥が罪を得るに及び、珣も撫州司馬に貶せられる<sup>(20)</sup>。彼の「無題詩」には「江行」の語が付せられているので、時間・空間を超越した所謂「無題詩」とは言い難い。自己の不遇を詠む意味では一脈通じる所がないわけでもない。無作爲に擧げた十首の中には、「讒るに非ずして逐臣となる」、「如し漁父に逢うて問はば」、「未だ是れ獨り醒むるの人ならず」、「卻て似たり反離騷」等の句があり、屈原を多分に意識しているし、「短纓何を用て濯はん」、「遠謫」の句に左遷の思いを読み取るのは、比較的容易なことであらう。なお、「憔悴異靈均」等數首は錢起の作という説もあるが、起が中書舍人にならなかったこと（翰林學士）や左遷の事實がなかったことから、いずれも珣の連作と見做す『全唐詩』の判斷に従っておきたい。<sup>(21)</sup>一方、王溥との關係及び官が中書舍人であったことから考えてみると、韓偓たちとの交渉が全くなかったとは思われないが、その詩中から李商隱の痕跡を見出すのは相當に困難である。

王周の「無題詩」は次のように詠まれる。<sup>(22)</sup>

冰雨肌膚力不勝、落花飛絮遶風亭。不知何事鞦韆下、蹙破愁眉兩點青。

梨花如雪已相迷、更被驚烏半夜啼。簾捲玉樓人寂寂、一鉤新月未沈西。

王周については正史に傳がないばかりか、『唐才子傳』及び『唐詩紀事』にも記載を持たない。わずかに『升菴詩話』が

王周嘉陵江、「嘉陵江水色、一帶柔藍碧。天女瑟瑟衣、風梭晚來織」

晚唐絕句、此殆爲冠、而洪氏唐絕不收。

と記しているが、傳記となり得ない。『全唐詩』の注にも「王周、進士の第に登る。曾て巴蜀に官たり。詩一卷あり<sup>(24)</sup>」とあるのみで、詳しい事跡は不詳である。ただ、注者はその詩中に見える「戊寅」及び「己卯」の語から後梁の貞明

四年（AD九一八）、或は宋の太平興國三年（AD九七八）、同じく後梁貞明五年、或は宋太平興國四年を措定し、唐末五代以降宋初の人と推測する。私もこれに與したい。

二首中に李商隱的發想を求めるならば、次のようになろう。

冰雪 別時冰雪、到時春（韓多郎即席爲詩相送一座盡驚他日徐方追吟連宵侍坐徘徊久之句有老成之風因成二絕寄酬兼呈畏之

員外」其の二）

落花 其奈落花朝（送從翁從東川弘農尚書幕）

飛絮 詠留飛絮後（憶雪）

鞦韆下 背面鞦韆下（無題「八歲偷照鏡」）

燈破 西燈大戎威北狄（題劍閣詩）

愁眉 愁眉淡遠峯（垂柳）

簾捲 簾捲飛燕還拂水（水齋）

玉樓 十二玉樓空更空（代應）

王周の場合も韓偓同様、二字乃至三字の詩題を持つ詩に李商隱風の措辭が見られる。そうした中で、この「無題詩」が最も顯著な作風を示していることは言うまでもあるまい。彼も李商隱の後裔の一人である。

北宋景德二年（AD一〇〇五）から詠み續けられた唱和集が一應の終了を見たのは大中祥符元年（AD一〇〇八）のことであった。この間、楊億、劉筠、錢惟演ら十七人が唱和した詩は二百五十首に及ぶ。彼らは、詩は李商隱に學ぶことを主張した。集中に、十五首の「無題詩」を残している。各々楊億が六首、錢惟演が四首、劉筠が五首である。

その出版は三十一年後の寶元二年（AD一〇三九）になる。卷一に收められる三人の「無題詩」第一首を挙げれば、次のとおり。<sup>(25)</sup> いずれも七律である。

曲池波暖蕙風輕、頭白鴛鴦占綠萍。纔斷歌雲成夢雨、斗廻笑電作噴霆。湘蘭自古傳幽怨、秦鳳何年入杳冥。不待萱蘇蠲薄怒、閒階鬬雀有遺翎。

誤語成疑意已傷、春山低斂翠眉長。鄂君繡被朝猶掩、荀令薰爐冷自香。有恨豈因燕鳳去、無言寧爲息侯亡。合歡不驗丁香結、祇得淒涼對燭房。

走馬章臺冒雨歸、後門猶軟滯前期。荷心出水終無定、蘿蔓從風莫自持。複帳麝輕難辟惡、曲房蠶嬾不成絲。漸漸隴麥藏鳴雉、更恨如阜一箭遲。

同じく李商隱詩からの引用と思われる語句は左のとおり。

頭白 秦中久已烏頭白（「人欲」）

夢雨 如何一夢高唐雨（「岳陽樓」）

湘蘭 湘蘭怨紫莖（「射相公」）

薄怒 幾時銷薄怒（「擬意」）

春山 總把春山掃眉黛（「代贈二首」其の二）

鄂君 牀空鄂君被（「念遠」）

荀令 荀令香爐可待薰（「牡丹」）

荀令薰爐更換香（「酬崔八早梅有贈兼示之作」）

丁香 芭蕉不展丁香結（「代贈二首」其の一）

韓偓及び晚唐詩人の「無題詩」（鈴木）

## 中國文學研究 第八期

走馬 走馬、蘭臺類轉蓬（「無題」「昨夜星辰昨夜風」）

後門 後門、歸去蕙蘭叢（「少年」）

出水 出水、舊知名（「無題」「照梁初有情」）

蠶蠟 春蠶、到死絲方盡（「無題」「相見時難別亦難」）

右の諸例でも明らかなように、西崑派詩人たちの李商隱傾倒ぶりは改めて語る必要はないであろう。しかし、こうした傾倒が宋初になって急に生じた現象ではなく、それが例え散發的であったとしても、また、脈絡を持ったものでなかったとしても、既に晩唐期から徐々に醸し出され、準備されていたものだという点を見逃すわけにはゆかない。韓偓たちの「無題詩」連作は時間的な條件を明らかに提示してしまったとは言え、その作詩態度には「座」の文學である点、多分に知的遊戯の雰囲気を持っている点等、西崑諸詩人と共通する側面が存在しているのである。

私は李商隱が「無題詩」に求めた世界はある特殊なメタファーを用いることによってイメージ喚起力を増幅させようとする営みであったと考えている。ただ、本稿では遺憾ながら、そうした方面にまで觸れる餘裕がなかった。後稿を期したい。

## 〔注〕

（1）紀昀：有失去本題而後人曰無題。如萬里風波一葉舟之類是也（『玉谿生詩評註』による）。

（2）張采田：此篇陳情不省、留別令狐所作（「李義山詩辨正」・『玉谿生年譜會箋』所收）

（3）拙論：「李商隱詩に見える芙蓉について」（『中國文學研究』・第五期）

（4）何焯：義山無題諸作、真有美人香草之遺（『義門讀書記』）  
（5）『全唐詩』卷六八三所收（中華書局版・以下、詩の引用はこれによる）。

（6）『新唐書』卷一八二「王渾傳」及び卷一八三「韓偓傳」による（中華書局版）。

（7）『全唐詩』卷六八四注による。

（8）『新唐書』卷一八三「韓偓傳」による。



- (9) 『全唐詩』卷六九〇及び『唐詩紀事』卷六六(鼎文書局版)による。
- (10) 『全唐詩』卷六三八による。
- (11) 『全唐詩』卷六三八注による。
- (12) 宋・范晞『對牀夜語』卷五(藝文印書館『百種詩話類編』中所收)
- (13) 右に同じ。
- (14) 『全唐詩』卷六七一所收。
- (15) 右の注による。
- (16) 『唐詩紀事』卷六八：彥謙學義山爲詩。
- (17) 『唐才子傳』卷九(世界書局版)：初師溫庭筠。
- (18) 『石洲詩話』卷二(人民文學出版社刊)：唐彥謙師溫八又、而頗得義山風致。
- (19) 『全唐詩』卷七一二所收。
- (20) 『全唐詩』卷七一二注、『唐詩紀事』卷六六及び『唐才子傳』卷九による。
- (21) 注19に同じ。
- (22) 『全唐詩』卷七六五所收。
- (23) 明・楊慎。卷二(『百種詩話類編』上・所收)
- (24) 注22に同じ。
- (25) 王仲羣注『西崑酬唱集注』(中華書局版)